広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要 XX 2008. 3. 22

さまざまな音楽に対する理解を深める音楽科の指導

坂 本 直 美
（本講座大学院博士課程前期在学）

Ⅰ 問題の所在と研究の目的

現在、日本の音楽事情は大変恵まれている。聴きたい気持ちさえあれば、いろいろなメディアをとおして、さまざまな音楽をいつでも聴くことができる。実際に学校現場での音楽教材においても、扱われている音楽のジャンルは確実に広くなってきている。しかしこの事実は、たくさんの人々が、さまざまな音楽を受け入れられるようになってきたという結論には直結しない。音楽そのものを楽しみ生活の中に取り入れる人たちは多くなったが、それぞれが好む音楽は偏っており、西洋音楽をベースにした音楽への執着度は依然として高いと筆者は強く感じるのである。

現職の教員でもある筆者は、全校で5クラス（特別支援学級2クラスを含む）という小規模中学校に勤務している。所属校の生徒は大変音楽が好きである。積極的に歌を歌い楽器演奏をし、音楽の授業を心から楽しめる生徒たちである。しかし、多様な音楽の学習としてアジアの民族音楽の授業を行った場合の反応は少し違う。ふだんよく教材として使うタイプの音楽（日本語の合唱曲や、西洋音楽の鑑賞曲）などに比べ、聴き慣れない音楽（たとえば、音高が不明確なかけ声がメインの民族音楽や、異質な音がする楽器の音色、発声法の違う歌声など）であるせいか、受け入れ方に戸惑っている生徒がたいへん多いのである。授業内で書かせた感想ワークシートの記述には、よく分からない、変だったという、その音楽に対しての興味が薄いことを示す消極的な意見も多くみられる。西洋音楽に慣れ親しんだ耳には、民族音楽など多様な音楽の多くが不思議な世界の音楽であると感じられる。また、興味がなかったり必要がないと思われる音は実際にそこで鳴っているにも関わらず気付かないことさえある。

このような実情の中で筆者は、中学校の音楽現場に立つ者として、生徒たちにさまざまな音楽の魅力を伝える義務があると感じる。さまざまな音楽を紹介するという程度にとどまらず、いろいろな音楽の価値を受け入れることができるという素地を生徒に植え付けることができたなら、将来にわたって音楽を愛好する心情を育てることにつながるのではないだろうか。

本稿では所属校において、西洋音楽をベースとしていないさまざまな音楽についての学習を、2つの手法で行う。ただし音楽科は授業数がたいへん少なく、実際に1つの実践にかけられる時間は限られるため、さまざまな音楽のすべてにふれさせることはできない。したがって本稿では、短時間でさまざまな音楽の価値を受け入れる素地を育成するには、何に焦点を当てて授業を行えばよいかを検証し、整理していくこととする。

授業の第1の手法は、さまざまな種類の音楽を、音楽の諸要素（旋律・リズム・音色など）に着目して体感させ、比較させることで、それぞれの音楽的特徴をつかませるものである。授業の第2の手法は、1つの民族音楽をとりあげ、社会的・文化的背景からのアプローチも含め、数時間かけて深く味わい学習するものである。本稿では、どちらの手法が効果的であるかを比較検討し、今後の教育現場に何が生かせるかを整理し、提示することを目的とする。

Ⅱ 2グループそれぞれの実践内容

1 音楽の諸要素グループ

この授業手法は、さまざまな種類の音楽の諸要素（旋律・リズム・音色など）に着目し、それぞれを体験させることによって、いろいろな音楽的特徴を把握させるものである。

(1)調査対象

A中学校 平成18年度2年生（35名）

(2)指導計画

表1　検証授業の内容

授業時数	学習内容	指　導　内　容
1 2	音階	4パターンの5音音階に調弦した箏を使い、その音階を使う曲を演奏させる。 (沖縄音階・中国音階・アラビア音階・ガムラン音階)
3 4	音色	35種類の楽器（生徒1人に1種類）を演奏させ、音色の特徴をつかませる。 (アジア・ヨーロッパ・アフリカ・アメリカ・その他)
5 6	リズム	4種類のリズムパターンを、全員に習得させる。 (和太鼓・ラテン・ポリリズム・ドラム8ビート)

2　1つの民族音楽の集中学習グループ

この授業手法は、1つの民族音楽（ここでとりあげたのはガムラン音楽である）を取りあげ、歴史的背景の把握、映像鑑賞、器楽合奏、歌唱を行うことにより、体験をとおして音楽的特徴を把握させるものである。

(1)調査対象

A中学校　平成19年度2年生（27名）

(2)指導計画

表2　検証授業の内容

授業時数	学習内容	指　導　内　容
1 2	歴史的背景 映像鑑賞	ガムラン音楽の社会的・文化的背景、音楽的特徴を映像を使いながら学習させる。 (音楽そのものが生活である、基本的に音程は合わない、口伝え伝承、その他)
3 4 5	器楽合奏	数種類のガムラン楽器で、バラガン・ジュール（簡単な器楽編成）の合奏をさせる。 (ゴング・カジャール・レオン・クンダン・チェンチェンを7〜8人で合奏)
6	歌唱	ケチャを行う。(数パートに分け、リズムパターンを覚えさせ、合わせて歌う)

Ⅲ　検証方法

検証授業前と検証授業後に、同一の検証曲（西洋音楽をベースとしていない民族音楽）を5曲鑑賞させる。それぞれの鑑賞直後に以下のようなアンケートとテストを行い、その変化をみる。

1　学習意欲や関心に関する意識調査

表3　意識調査アンケート

質問1　楽器を演奏することが好きである	質問10　作曲をしてみたい
質問2　歌うことが好きである	質問11　聴くだけでなく、演奏した方がその音楽のことを理解できると思う (体験的学習の必要性)
質問3　音楽を聴くとき、メロディーが気になる	質問12　音楽を聴いた瞬間、好き嫌いを即座には決めない
質問4　音楽を聴くとき、リズムが気になる	質問13　音楽を聴くときに、今まで聴いたことのあるタイプの音楽かどうかを考える
質問5　音楽を聴くとき、楽器の音色が気になる	質問14　音楽を聴く時に、その曲の特徴（旋律・リズム・音色など）に気づくことができる
質問6　音楽を聴くとき、歌声の質が気になる	質問15　聴き慣れない音楽に対してでも、その音楽のよさを見付ける自信がある
質問7　いろいろな音楽に興味がある	
質問8　幅広くいろいろな音楽を聴いたり歌ったりしてみたい	
質問9　いろいろな楽器を演奏できるようになりたい	

音楽全般に対する関心度、音楽の諸要素ごとに関する知覚・感受の度合い、音楽の把握の仕方など生徒自身の意識について、表3の内容でアンケートを行い、5段階評価させる。

2 検証曲に対する関心度を計る調査

検証曲5曲に対して、どのくらい興味・関心があるか、興味・関心がわいたかについて、表5の3項目を5段階で計る。

この検証方法は日本音楽教育学会第37回大会共同企画「異文化理解を踏まえた多文化音楽教育の教育方法の提案と検証Ⅲ」[1]で扱われていたものである。この研究は、いくつかの異文化音楽の実践の前後に4つの検証曲を聴かせ3つの質問項目で関心度を計るものであった。本稿では、その検証曲の中の3曲（ブルガリア民謡・アイヌの座り歌・タイのモーラム）に別の2曲を加え、同じ質問項目で関心度を計った。

表4　検証曲（5曲）解説

①ブルガリア民謡 地方の普通の年配の女性たちのコーラスが起源。日本民謡にもよくにた声、不協和音から生じる鮮烈なハーモニー、こぶしのきいたメロディーなどが特徴である。
②アイヌの座り歌 女性二人が太鼓を中に挟んで座り、リズムを取りながらうたう輪唱である。音楽というより何かを唱えているようにも感じられる不思議な雰囲気の音楽である。
③タイのモーラム 独特のリズムとケーン（笛の一種）による主旋律、裏返って途切れそうなボーカルを特徴とし、その内容は生活の貧窮や政治批判や人情ものなど多岐に渡る。
④ボリビア　緑の大木 フォルクローレの曲。歌が入っていない、楽器だけの演奏であるが、サンポーニャ独特の音色とチャランゴの刻みがとても心地よい楽曲である。
⑤西アフリカ　ンゴマ ンゴマとは太鼓のことで、そこから転じて伝統的な踊りを意味する。特徴的で踊り出しそうなリズムに加えて、かけ声が心地よく入っていく。

表5　検証曲5曲に関する事前・事後アンケート内容

①　この音楽をもう一度聴きたい
②　この音楽がどのような内容か知りたい
③　この音楽の演奏されているところへ行ってみたい

Ⅳ　分析結果・考察

表3で表した意識調査アンケート（5段階）の結果は次のとおりである。

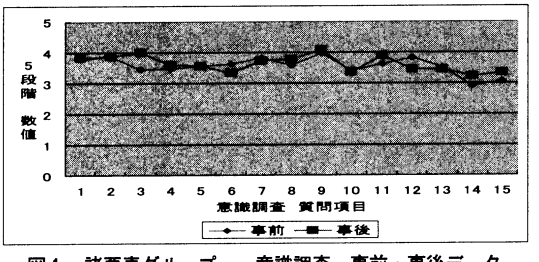

図1　諸要素グループ　意識調査　事前・事後データ

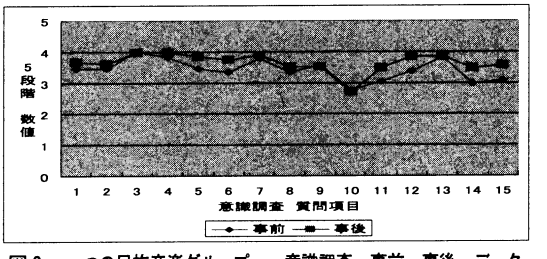

図2　一つの民族音楽グループ　意識調査　事前・事後　データ

2グループの数値は、ほぼ同じ範囲に散らばっている。共通していえることは、①事後のデータがほとんどの項目で事前より上回っていること、②折れ線の変化の仕方が類似しているということである。今回の検証では2グループの取り組みそれぞれが、どの部分でどのような効果をもたらしているかを明らかにするものである。次の検証の視点にそって分析・考察を行う。

1　「音楽の諸要素」に関する意識が高まったか。

生徒の意識調査において、音楽の諸要素に関わる質問3～質問6について、事前・事後の平均値の差を図3と表6に表す。

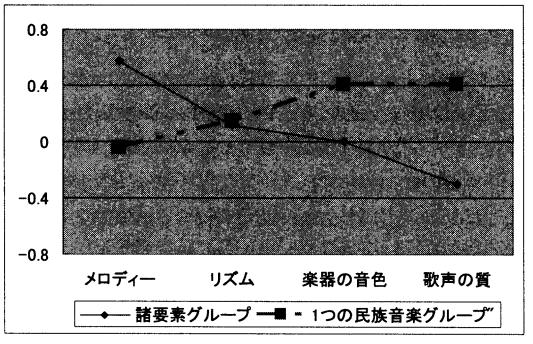

図3　質問3～質問6　事前・事後　平均値の差

表6　質問3～質問6　事前・事後　平均値の差

	諸要素グループ	1つの民族音楽グループ
メロディー	0.57	0
リズム	0.11	0.15
楽器の音色	0	0.41
歌声の質	−0.3	0.41

質問内容は、「メロディー」「リズム」「楽器の音色」「歌声の質」について、「音楽を聴くときに、気にかかるか」である。このグラフの数値がプラス側に高ければ高いほど、音楽を聴くときにその諸要素の特徴が気にかかるようになったということになる。グラフ上でみてとれるのは、効果が上がった項目がそれぞれ違うということである。このグラフの8つの数値のうち、5つの数値（「諸要素グループ」のメロディー・リズム、「1つの民族音楽グループ」のリズム・楽器の音色・歌声の質）が上昇し、2つの数値（「諸要素グループ」の楽器の音色、「1つの民族音楽グループ」のメロディー）が変化せず、1つの数値（「諸要素グループ」の歌声の質）が下降している。全体的にみれば、ねらいをもってこのような授業実践を行うことについては大変意義があるということが分かるが、それぞれの上昇部分がなぜ違うのだろうか。

(1)メロディー

「メロディー」は、「諸要素グループ」が圧倒的に高い数値である。これは授業実践において、メロディーの楽しさを味わわせる場を設定したことが理由としてあげられる。中国音階・沖縄音階・アラビア音階に調弦した楽箏を用い、実際にポピュラー音楽を演奏した楽しさは、ワークシートの記述にも多く現れていた。それに対し、「1つの民族音楽グループ」は数値の変化がない。ガムランの音楽をメロディーとしてとらえるのが難しかったとも考えられる。基本的にガムラン音楽は金属打楽器の合奏であるため、微妙な打楽器の音の高低や、不協和音などをメロディーとしてとらえさせることができなかったのではないかと筆者は考える。検証曲5曲はガムラン音楽と同じように不協和音のものも多いので、「1つの民族音楽グループ」の方が数値が伸びるのではないかと思っていたが、違う結果となった。ガムラン楽器の音の高低を含めてメロディとしての魅力をもう少し伝える必要があったと思われる。

(2)リズム

2グループの数値が最も近いのが「リズム」である。「諸要素グループ」の授業実践においては、和太鼓・ラテンパーカッション・ポリリズム・ドラムの4種類のリズムを実際に体験させた。「1つの民族音楽グループ」では、本物のガムラン楽器を使い、ガムランの基本的なリズムパターンを覚えさせてリズムアンサンブルをした。今回の検証授業は体験をなるべく取り入れるということを意識したが、どちらの取り組みも、同じくらいの数値の伸びをみることができた。

(3)楽器の音色

「諸要素グループ」は、35人の生徒に35種類の楽器（民族楽器も含める）を与え、音を実際に出させ、たくさんの音質にふれさせるという授業を行った。実際に本物の楽器を用いて、生の音を味わわせたのだが、その楽器を生かす音楽を演奏する、また音楽として成立させるところまで授業を展開させることが出来なかったのが数値が上がらなかった要因だと思われる。「1つの民族音楽グループ」の方が、数値の伸びがみられのは、本物のガムラン楽器を使って本物の合奏をさせたことが1番の理由であると思われる。本物の金属打楽器の響きは、音楽室いっぱいに、振動と共に心まで響いたように思われた。音楽全体として本場のものに近かったことが効果を高めたと思われる。

(4)歌声の質

「歌声の質」に関しては、「諸要素グループ」の授業内容に組み込んでいなかった。楽器の音色の授業効果が転化し、歌声の質の認知にも影響を与えることを期待していたが、そのような効果は現れなかった。それに比べ、「1つの民族音楽グループ」は、数値の伸びが大きい。本稿の3における曲への転化のデータにおいては、すべての数値が上がったとはいいきれないが、この意識調査においてはよい方向に結果がでている。これは授業の中で歌を扱ったことが鍵となった。「1つの民族音楽グループ」では、ガムラン音楽の基礎知識としてケチャの映像を見せ、実際に歌わせた。このことがこの意識調査において数値をあげる要因となったのではないかと思われる。

上記の分析をまとめると、①ガムラン音楽のような金属打楽器合奏主体の音楽は、メロディーを諸要素として学ばせるのは難しい、②諸要素だけを学ばせることに終始すると効果が上がりにくい、③学んだ諸要素を実際の音楽の中で活かして演奏すると、効果があがりやすい、④1つの民族音楽をじっくり学習すると、その民族音楽の主要素に関してならば複数の要素を一度に学ばせることができ、且つ効果的である、ということになる。

「諸要素グループ」では、複数の諸要素を学ばせるために3つの演習を行ったが、「1つの民族音楽グループ」ではガムラン合奏を中心として授業を構成した。1つの民族音楽に関して集中して取り組んだ結果、その民族音楽が含んでいる諸要素に関しては深く学習できると思われる。

それぞれの取り組みでは、数値の伸びている項目が違う。ほぼねらいどおりの効果をあげることができた項目があれば、そうでないものもある。数値の伸びていない項目は取り組みの方法が適していなかったり、その諸要素への触れ方が浅かった結果であり、工夫改善の方法を考えていく必要がある。

検証授業そのものは、どちらの実践も生徒の興味を大いに惹きつけることができた。題材の面白さは、ねらいに関しても効果的に作用しているといえる。

2　「さまざまな音楽を受け入れる素地」ができたか。

1により、諸要素ごとに音楽の特徴を的確に把握することに関しては、成果をあげることができた。

次は1の成果が「理解が深まる」ところにつながっているかどうかについて、意識調査から読み取れることをあげてみる。

図4、表7の数値は各グループの質問8から質問15の事前・事後の平均値の差である。このグラフの数値がプラス側に高ければ高いほど、その授業実践によって、聴き慣れない音楽であっても受け入れようという素地ができたということになる。

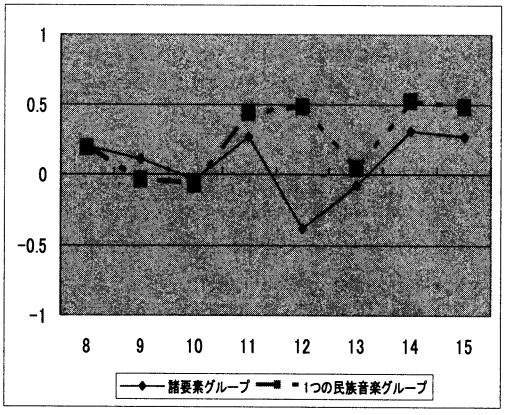

図4　質問8～質問15　事前・事後　平均値の差

表7　質問8～質問15　事前・事後　平均値の差

	諸要素グループ	1つの民族音楽グループ
質問8	0.2	0.19
質問9	0.11	0
質問10	0	-0.1
質問11	0.27	0.44
質問12	-0.4	0.48
質問13	-0.1	0.04
質問14	0.31	0.52
質問15	0.27	0.48

まずグラフ上から読みとれることは、ほぼ同じような型のラインである、ということである。数値の伸びの違いはあるものの、折れ線の形が大変似かよっている。2グループとも、伸びがみられた項目は、「質問11　聴くだけでなく、演奏した方がその音楽のことを理解できると思う」(諸要素グループ＋0.27、1つの民族音楽グループ＋0.44)、「質問14　音楽を聴く時に、その曲の特徴（旋律・リズム・音色など）に気づくことができる」(諸要素グループ＋0.31、1つの民族音楽グループ＋0.52)、「質問15　聴き慣れない音楽に対してでも、その音楽のよさを見付ける自信がある」(諸要素グループ＋0.27、1つの民族音楽グループ＋0.48)、の3項目である。これらの項目で数値が上がったことから共通して、①検証授業で学習したことにより、いろいろな音楽に興味がわき実際に演奏したいと感じるようになった、②検証授業前に比べ聴き慣れない音楽に出会ったとき、特徴をとらえその音楽のよさを見つける自信がついた、という変化が現れたとみることができる。

また数値の増加があまりみられなかったのは、「質問10　作曲をしてみたい」(諸要素グループ　0、1つの民族音楽グループ－0.1)、「質問13　音楽を聴くときに、今まで聴いたことのあるタイプの音楽かどうかを考える」(諸要素グループ－0.1、1つの民族音楽グループ＋0.04)、の2項目である。作曲については、新しい音楽を知ればこんな曲を作りたいという創作意欲が生まれるかと想定したが、それに関しては全く効果が現れなかった。またどのようなタイプの音楽かどうかを考えることについては、もともとの数値が高かったこともあり、事前事後の数値の伸びとしては、改めて大きな変化は現れなかった。

また、2つの実践のデータを比較すると、「1つの民族音楽グループ」の数値の伸びの方が大きい。1つの諸要素について何種類も学ばせるより、1種類のものを本格的に学ぶほうが効果的であるという結果がここでは出たということになる。

上記の分析により、①2つの実践は同じ項目で数値が伸びている、②「1つの民族音楽グループ」の方が数値の伸びが大きい、ということが分かる。数値の伸びの違いはあるにせよ、どちらの検証授業においても、聴き慣れない音楽を聴いた時にも客観的に理解をしようとする意識面での素地を作ることが出来たといえるであろう。

3　意識としては高まった「音楽を受け入れる素地」は、実際に曲に対する思いへ転化したか。

事前・事後で同一の検証曲を聴かせ、それに対する印象にどのような変化が現れたかどうかを検証するため、5曲について3項目の質問をし、各項目を5段階で回答させた。

表の中の数値は、左から、①諸要素グループ、②1つの民族音楽グループ、③日本音楽教育学会第37回大会共同企画「異文化理解を踏まえた多文化音楽教育の教育方法の提案と検証Ⅲ」(以下、大会グループ)におけるデータである。③は、学会で発表された6つの実践の事前事後で出されていたデータを平均化したものである。この6つの実践は、それぞれ1つの異文化音楽を何時間もかけて学ぶ方法であるため、②の授業実践と非常に似ている。①とのデータを比較するにあたって、何か共通点が見いだせると想定し、データ比較に加えた。

表８の中の数値は、事後データの平均値から、事前データの平均値を引いたものである。

表8-1　ブルガリア民謡

	諸要素	1つの音楽	大会
聴きたい	0.11	0.04	0.17
内容を知りたい	0.02	0	**−0.1**
場所へ行きたい	0.01	0	0.3

表8-2　アイヌの座り歌

	諸要素	1つの音楽	大会
聴きたい	0.08	0.3	0.27
内容を知りたい	**−0.2**	**−0.1**	0.13
場所へ行きたい	0.3	0	0.37

表8-3　タイのモーラム

	諸要素	1つの音楽	大会
聴きたい	0.15	0.44	0.07
内容を知りたい	0.11	0.26	0.03
場所へ行きたい	0.08	0.11	0.18

表8-4　ボリビア　緑の大木

	諸要素	1つの音楽	大会
聴きたい	0.15	0.3	*
内容を知りたい	**−0.3**	0	*
場所へ行きたい	0	**−0.1**	*

表8-5　西アフリカ　ンゴマ

	諸要素	1つの音楽	大会
聴きたい	0	0	*
内容を知りたい	0.11	0.07	*
場所へ行きたい	0.23	0.04	*

この表より読みとれることは、ほとんどの項目が数値的に上昇しているということである。特に、「この音楽をもう一度聴きたい」の項目に関しては、どのグループもどの曲も全て数値が上昇している。一方数値が下がった項目もある。諸要素グループは15項目中２項目、１つの民族音楽グループも15項目中２項目、大会グループは９項目中１項目である。特に、アイヌの座り歌と緑の大木に集中しており、この曲は２つの検証授業からの影響をあまり受けなかったということが分かる。

次に、質問項目別のグラフで、各実践の成果があったかどうかを検証する。

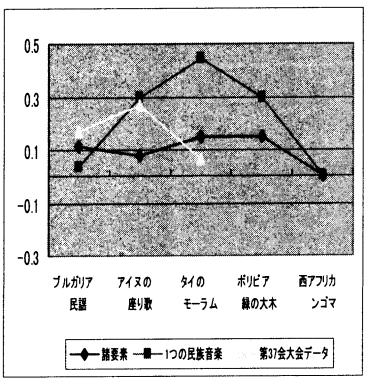

図５　「この音楽をもう一度聴きたい」
事前・事後平均値の差

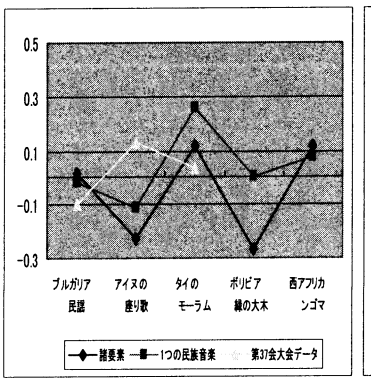

図６「この音楽がどのような内容か知りたい」
事前・事後　平均値の差

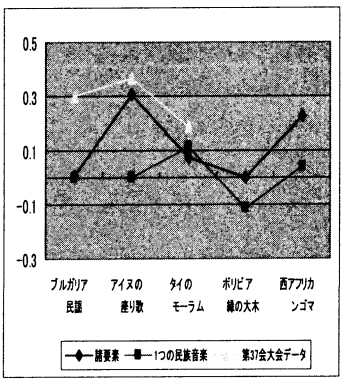

図７「この音楽の演奏されているところへ行ってみたい」
事前・事後　平均値の差

図５から図７の３つのデータで共通する点は、「この音楽がどんな内容なのかを知りたい」の数値にマイナスが出ているということである。「もう一度聴きたい」「その場所へ行きたい」という感情を起こさせることはできたが、「内容を知りたい」と思わせるような実践ができていないということになる。特にアイヌの座り歌は、上記のような傾向が強く、しかもプラスにもマイナスにも数値のぶれが大きい。アイヌ

の座り歌が最もメロディーラインが把握しにくく、音楽としてとらえにくい音楽であるということからこのような極端な結果が現れたとも思われるが、言い換えれば、実践によって興味を持たせられれば最初の印象が好意的ではないだけに、数値も大きく上がる可能性があるということになる。実践の内容によっては、大きな効果が期待できると思われる。

この検証の対象は、諸要素ごとに何種類かのものを学ぶ方法（①諸要素グループ）と、それぞれ1つの音楽を何時間もかけて学ぶ方法（②1つの民族音楽グループ・③大会グループ）に分けられる。大きく分けてこの2つの方法に関して、この曲のこの項目に影響を与えやすいという傾向や特徴は特になかった。

V　総括

本研究は、多様な音楽にふれさせる機会を与え音楽の特徴を的確に把握できるよう指導を工夫すれば、さまざまな音楽（聴き慣れない音楽）に対しての理解が深まるという仮説のもとに行った。違う手法で構成した2つの授業実践において、見いだせたことがある。本物の楽器を使い、現地で本当に演奏されている音楽を、自分のものになるまで繰り返し合奏する授業はとても高い成果を生むということである。「1つの民族音楽グループ」の実践として扱ったガムラン音楽は生徒の感想の記述からも明らかなように、非常に大きな興味を引き出すことができ、それは意識調査の数値にも大きく現れた。

2つの授業実践はどちらも、さまざまな音楽に対しての理解を深めることができた。その数値の伸びに差はあるものの、ねらいを達成するための授業工夫は必要であり、効果を生むといえるであろう。結果として、意識としては高まった「音楽を受け入れる素地」は、数値の上がった曲・項目については、その曲に対する思いの転化が現れたといえる。数値の下がった曲・項目に関しても効果をあげるためには、今後具体的にどのような実践を行うべきかを、これからの課題として考えていきたい。

【引用文献】

1）日本音楽教育学会第37回大会（於：千葉大学）共同企画「異文化理解を踏まえた多文化音楽教育の教育方法の提案と検証Ⅲ―心の教育としての多文化音楽教育　小学校・養護学校から大学教育まで」資料　2006

【参考文献】

・星川京児『知っているようで知らない～民族音楽おもしろ雑学事典』ヤマハミュージックメディア　2002
・文部科学省『文部科学省（平成16年一部補正）中学校学習指導要領（平成10年12月）解説－音楽編－』文部科学省　2004
・日本音楽教育学会第37回大会（於：千葉大学）共同企画「異文化理解を踏まえた多文化音楽教育の教育方法の提案と検証Ⅲ―心の教育としての多文化音楽教育　小学校・養護学校から大学教育まで」資料　2006
・島崎篤子・加藤富美子『授業のための日本の音楽・世界の音楽』音楽之友社　1999